埼玉大学紀要 教育学部，72(2)：169－189 (2023)

アンディ・シードの学校小説に見る教員の日常
――教育者・文学者・家庭人のワーク・ライフ・バランス――

武田ちあき　　埼玉大学教育学部言語文化講座英語分野

キーワード：アンディ・シード、学校小説、教員生活、メンタルヘルス、ヨークシャー

１．序

イギリスの東北地方を舞台とするヨークシャー学校小説の双璧、ジャック・シェフィールド(Jack Sheffield, 1945-)の「先生」シリーズ (*Teacher* series, 2004-2022)と、ジャーベイズ・フィン(Gervase Phinn, 1946-)の「デールズ」シリーズ(*Dales* series, 1998-2021)は、ともに長年ベストセラーとして英国民の人気を博し、[1] 近年いずれも全 15 巻でついに堂々の完結を迎えたが、その陰でひっそりと独自の光彩を放つ、もうひとつのヨークシャー学校小説シリーズがある。

アンディ・シード(Andy Seed, 19?-)の「すべての教師」シリーズ(*All Teachers* series, 2011-2013)は、各巻約 400 ページの大冊ながら全 3 巻と、量的には上掲の 2 シリーズに比べて、かなりコンパクトである。また現在ハードカバーは中古でしか入手できず、売れ行きもそこそこにとどまっていたものと推測される。

シードのシリーズが商業的成功に直結しなかった理由として考えられるのは、ひとことで言えば、その作風の地味さであろう。フィンはお笑いにあふれ、シェフィールドはおしゃれ。どちらもそれぞれにドラマティックな、テレビドラマのような筋運びで読者をぐいぐい惹きつける。[2] それに対し、シードの作品は、のんびりゆったり、慌てず騒がず、淡々と進む。

シード自身は教員としては才気煥発にしてエネルギッシュで、フィンやシェフィールドの教員時代にも負けない、抜群の力量の持ち主であることが、作中のエピソードから容易に窺い知れる。作家としても、児童書・ノンフィクション・詩集・ユーモア本では、やはりこの多彩なジャンルで活躍するフィンと肩を並べる存在で、2015 年にブルー・ピーター図書賞、2019 年には北サマセット教員図書賞を受賞。日本でも『世界一キモイいきもの図鑑』(2020)などが好評を得ている。本人のキャラはフィン以上に、明るくおちゃめなお調子者・ひょうきん者・いたずら好きであることが、そのホームページからも明白である。

なのに、この小説 3 部作は、その道化の切れ味を封印した語りに徹している。アイルランド系のフィンのドライな飄逸とも、スコットランド系のシェフィールドのウェットな抒情とも異なる、きわめてイングランド的な、抑制の効いたアンダーステイトメント。あくまで悠然と展開する物語の道行きは、ゆるやかにうねりながら連なるヨークシャー・デール地方の地形そのものであり、この地に生きる人々の、暮らしのペースと時間の感覚を体現している。どんな椿事も呑み込んで雄大に広がる田園で、日々の営みを朴訥に重ねていく生き方。その深い滋味を、シードは農民にも教員にも共通するものとして、じっくりと醸し出してみせるのだ。

こうした手法でこそ浮かび上がる「教員の日常」には、何が見出されるのか。本稿では、一見「平凡な毎日」という印象を与えがちな「平素の生活」の物語に、何がこめられているのかを、この一人称小説において語り手であり主人公でもあるシードの、教員としての意識の形・感情の形から分析することによって、教育者・文学者・家庭人としてのシードが教員生活において果た

した絶妙なワーク・ライフ・バランス、さらには小説家としてのシードの特異な達成と功績を、明らかにしたい。

２．意識の形

2-1 タイトル

シードの教員および作家としての基本姿勢は、まずその作品のタイトルに如実に表れている。シードの連作の表題、『すべての教師、大なるも、小なるも』(*All Teachers Great and Small,* 2011)、『すべての教師、輝ける、美しき』(*All Teachers Bright and Beautiful,* 2012)、『すべての教師、賢く、素晴らしき』(*All Teachers Wise and Wonderful,* 2013)はみな、ヨークシャーの獣医、ジェイムズ・ヘリオット(James Herriot, 1916-95)の世界的大ヒット作、「ドクター・ヘリオット」シリーズ(“Dr Herriot” series, 1970-92)の表題のパロディである（Table 1 参照）。

Table 1　Titles of Two Yorkshire Series of Creatures and Teachers

James Herriot	Andy Seed
All Creatures Great and Small (1970, 1972, 1973)	*All Teachers Great and Small* (2011)
All Things Bright and Beautiful (1973, 1974)	*All Teachers Bright and Beautiful* (2012)
All Things Wise and Wonderful (1976, 1977)	*All Teachers Wise and Wonderful* (2013)
The Lord God Made Them All (1981)	
Every Living Thing (1992)	

「動物たち」(Creatures)を「教師たち」(Teachers)に置き換え、韻をしっかり踏みながら、ヨークシャー・デールという同じ舞台で主役を入れ替える、この洒落た趣向を発案したのは、じつはシード本人ではなく、シードは第 1 巻の謝辞で「タイトルのアイデアを出してくれたチャーリー・バトラーに感謝する」(v)と述べている。小説原作でも BBC のテレビドラマ化でも世界中で大当たりをとり、この地を一挙に国際的な観光地にしたヘリオットのシリーズを下敷きにすることで、シードは読者に「教員生活の価値」というテーマを、獣医の生活と同じくらい崇高なものとして高らかに掲げるとともに、同じくらい親しみ深いものとして楽しげに差し出しているのだ。

そもそも、ヘリオットの連作のタイトル自体が、アングロ・アイリッシュの讃美歌作家、セシル・フランシス・アレグザンダー(Cecil Frances Alexander, 1818-1895)の代表作「すべて輝ける美しきもの」(“All Things Bright and Beautiful,” 1848)の、以下のリフレインから採られている。

All things bright and beautiful,
All creatures great and small,
All things wise and wonderful:
The Lord God made them all.

原詩では各行末の -ful と -all の脚韻が abab の型の交互韻(cross rhyme)を成すよう、行が配列されているが、ヘリオットはこのうち、みずからのテーマである「動物」(creatures)を含む行を第 1 作に充てるべく、順番を入れ替えたものと思われる。

ヘリオットのシリーズ全編に BGM として響いているのは、この賛美歌であり、ヘリオットは、「神のお膝元」(God's Own Country)と呼ばれるほど風光明媚な、この国立公園の地に生きる動物たちを描くことで、崇敬の念をこめて、神の御業を賛美している。

シードの本歌取りでは、これにもうひとひねりが加わっている。表題には「すべての教師」とあるものの、章題はすべて児童の名前であり、作中では一貫して子どもたちの姿のほうが前景化されている。「多彩な教員カタログ」的な内容を予期し、期待する読者は、肩透かしを食うのだ。

子どもたちを主役に据え、教員は脇役に回る、この形は、「教員は子どもを輝かせる存在」、「教員は子どもを輝かせてこそ光る存在」、「教員は子どもの奥で輝いている存在」という捉え方の表れだろう。つまりシードは、子どもたちを描くことで、教員への賛歌を謳い上げているのだ。

縁の下にとどまり、目立たない立ち位置を守りつつ、ふだんの学校生活を裏から支える、平凡に見える教師の生活の、真の偉大さ――シードがそのきららかな書題で示しているのは、普通の教員が日々成す偉業への、深い敬意なのである。

2-2 目次

シードの教員としての意識の形は、作家として提示する目次の形にも、明確に表出している。前項で述べたように、各巻の章題はすべて児童の名前、しかもファースト・ネームのみであり、目次は素っ気ないくらいにシンプルな構成である（Table 2 参照）。

しかし、この「本の内容 (Contents) 」は、同時に「クラスの中身(Contents)」にもなっている。つまり、この「目次」は、そのままクラスの「名簿」なのだ。たとえば第 1 巻では、序章から第 23 章までの全 24 章に、シードの担任クラスの児童 24 名が全員 1 章ずつを割り当てられており、1 人として取り残しがない。すなわち、読者は表紙をめくって、この目次を目にするとき、教壇で出席をとる教師の位置に立たされるのである。

この目次／名簿によって、教員／作家であるシードが呈示しているのは、児童ひとりひとりの名前の背後に広がる物語の存在である。初任者としての赴任早々、1 日で全員の名前と顔を覚え、1 週間で各人の特徴とクラスの様子を把握するほどの、シードの優れた記憶力と観察力は、学級運営と物語叙述の両方に活かされる。シードがこのリストで表明しているのは「ひとりひとりがみな、1 章の主人公となるに値するドラマを持っている」という、子どもたちへの敬意、愛情、尊重の念なのだ。

そしてこのリストは、シードが子どもたちと共有した日々の記録とフィードバックの目録、つまりは通知表のインデックスとしても機能している。第 3 巻で、通知表の記入にとりかかりつつ、シードは、こうつぶやく。

> I didn't need lists of marks or pages of written work or exercise books to look at, nor test results nor reading ages. I knew every child in my class well: who was good at what, how much they'd improved, what they were capable of, their attitudes, willingness to make an effort and their potential. I'd spent at least ten months with them, watching, listening, talking, reading their work and seeing the understanding – or lack of it – on their faces as I explained what the world was about. (368)

（得点表なんて要らない、作文や練習帳をめくるまでもない、試験結果も読書年齢も参照不要。クラスのどの子のことも、よくわかっていた。だれが、何が得意なのか、どれくらい伸びたか、

何ができるのか、どれくらいがんばるつもりでいるか、がんばりたい気持ちを見せているか、やろうと思えばどれくらいできるのか。この子たちと 10 か月は過ごしてきたのだ、よく見て、聞いて、話して、書いたものを読んで、世界のことを説明していても、わかっているか――それとも、わかっていないか――顔を見ればわかるくらい。）

Table 2 Contents of *All Teachers Great and Small* (2011)

Contents

Prologue	Sylvia	1
Chapter One	Jack	8
Chapter Two	Carol	31
Chapter Three	Malcolm	48
Chapter Four	Terry	63
Chapter Five	Eve	77
Chapter Six	Fergus	97
Chapter Seven	Hugh	114
Chapter Eight	Tracey	133
Chapter Nine	Wilf	151
Chapter Ten	Isaac	166
Chapter Eleven	Rose	180
Chapter Twelve	Barney	193
Chapter Thirteen	Anita	216
Chapter Fourteen	Lucinda	226
Chapter Fifteen	Charlie	242
Chapter Sixteen	Cameron	256
Chapter Seventeen	Martha	268
Chapter Eighteen	Clive	278
Chapter Nineteen	Penny	293
Chapter Twenty	Josie	307
Chapter Twenty-One	George	320
Chapter Twenty-Two	Heather	334
Chapter Twenty-Three	Nathan	352

(vii-viii)

子どもたちの日常をまるごと受けとめ、それぞれの個性・意欲・可能性を見抜き、結果だけでなく成長のプロセスに寄り添う、総合的で全人的な評価としての物語。それは、シェフィールドのシリーズの副題、『裏・学校日誌』(*The Alternative School Logbook*)に倣うなら、まさに「裏・通知表」(the alternative report)である。この文学的な形式の「もうひとつの通知表」によってこそ、シードは、画一的な基準で単純に数値化できるような表面的な事実・統計・データを超えた、教育現場における個々の児童の、生き生きとした真の姿を記録し、報告している。それは、当時のサッチャー教育改革の成果主義・効率主義に対する強力な抗議・批判として機能する点でも、シェフィールドと同道する企図といえよう。

2-3 プロット

シードの意識の形をなにより明瞭に表現しているのは、プロット構成である。各チャプターは十数ページと短いものの、シーンの切り分け方はざっくりと、きわめて大きく、学校の場面と家庭の場面が画然と区切られ、それぞれがまとまったボリュームを確保している。

シェフィールドのテキストが、物語の舞台である 1980 年代に一世を風靡したアメリカ MTV 局のミュージック・ビデオ番組さながら、ビッツやチャンクに細かく刻まれたシーンがめまぐるしく切り替わることで時代のスピード感を出し、そのオムニバス形式によって学校と地域の一体感を織り成していること、またフィンのストーリーが、視学官の経歴からくる巡回視察の視点で、名物紹介が連なっていく紀行番組のような物珍しさに彩られていることと比べてみると、シードのプロット・デザインは、何であれ目立つような技巧を、あえて避けたものであって、いつものことが、いつものように進んでいく、退屈なまでの安定感と安心感が、逆に、際立った特徴となっている。

職場と家庭を別枠に切り離すシードのプロットのパターンは、シングルタスクに徹して目の前のことに意識を集中する、シンプルで落ち着いた、着実で堅実な働き方／生き方を具現している。シードの教員 2 年目に赴任してきた有能な女性校長は、周囲が目を回すほどのマルチタスクで、教育改革の時代の要請に応えようと超人的な働きぶりを発揮するが、シードはむしろ、それとは対照的に、古き良きヨークシャーの住人の、そしてその子女たる児童たちの、暮らしの歩みに足並みを揃える。そのように一事に専念する凡事徹底の姿勢が、結果的には生活のメリハリ、気分転換、ストレス・マネジメントになる。

そして、いったんきっちりと学校の中と外を区切って、両者を並置する定型だからこそ、章が進むにつれ、段階的に見えてくるものがある。

まず、学校での児童教育と、家庭での子育て。このふたつが同時進行することで、担任の視点に保護者の視点が加わり、学童たちの家庭での姿に思いの及ぶ、視野の広い教員に成長していく様子が、次第にクローズアップされる。

また、学校の教員の苦労と、地域の農民の苦労。前者に押しつぶされそうになるたびにシードは、後者の大きさに比すれば前者など小さい、と自分に言い聞かせる。荒地で苦闘を重ね、何があっても諦めずに耐え忍ぶ、心優しく逞しき農民の、人生経験と人間洞察、神への信心に触れ、励まされ、支えられて、また学校へ向かう。この心の駆け込み寺に、シードは幾度も救われて、より度量の広い教員を志していく。

すなわち、教える人、育てる人である、教員のシード自身が、家庭に、また地域に、教えられ、育てられる――シードは地域の子どもと、自分の子どもと、共に育っていくのである。

さらに、学校と家庭をあえて仕切るからこそ、その仕切りを越えてつながるもの、持ちこまれ

るものの意味も、プロットの裂け目から、強く光を放つ。

ひとつは、「けじめ」を脇に置いていい事態が起こった時の、家族の存在の意味である。学校でのトラブルは家に入れず、帰宅するとまず、日中何があったか、妻の話をよく聞こうとするシードの生活態度は、プロット構成そのもの。しかし妻は夫の顔色から悩みを察し、慰め、励ます。また夫のほうも、学校でのとびきりのエピソードを、みやげ話に持ち帰ることを楽しみにするし、学校で初めてビデオカメラを導入した際には、息子たちの一日を試撮する。なんだかんだ言っても、良い時も悪い時も(for better or for worse)、家族こそが仕事の支え、とわかる話が、時折顔をのぞかせて、読者の心をじんわり温める。

もうひとつは、いくら職住分離を心掛けたところで、心の隅にはいつもクラスの児童のことがある、とわかる章のオチ。これはもうお約束の定石ですらあり、その豊かなバリエーションが、シードの小説の最大の魅力であると言っていい。そのように児童が通奏低音として、またフィナーレを決める音として存在しているプロットは、児童のことをいつもずっと頭の隅に置いていて、いざという時に晴れ舞台に出す、教員としての暮らし方・生き方を映している。それがこの小説の出版自体にも敷衍されており、第 1 巻の謝辞には「最後に、感謝を‥‥だれよりも、3 組の子どもたちに。きみたちがいま、どこにいようとも」(v)とある。3 組を教えてから 30 年、その間ずっと、この子らは彼の中にいて、それをいま本の形で世に出すのだ。そして、どこにいようと「きみたち」はいまも、シードの心の中にいる。児童の存在が、教員の家庭生活にも、そしてその後の人生にも、豊かな輝きをもたらすことを、シードは感動的に実演してみせているのである。

３．感情の形

3-1 嘆き

イギリス人らしくポーカーフェイスで冷静に、プロの教員たるにふさわしい身の御し方で日々を過ごすことを旨とするシードだからこそ、平穏な日常からはみだしてあふれ出る感情の形が、テキストにおいて、いっそう印象的な像を結ぶ。シードの心がそのように強く衝き動かされるのは、その感情を喚起する事柄が、教員生活の重要な本質に関わっているからでもある。

そうしたシードの感情表現のひとつの典型が「嘆き」である。学校現場とは、想定外の事態が起こることこそが日常茶飯事である場所。そして、教員のコントロールの及ばない要素によって翻弄されるのが当たり前の場所。そこに身を置く以上は避けることができない災難を前にして、シードが多用するのは、願望を表す仮定法である。

第 3 巻で臨海学校を引率するシードは、悪童コリンにさんざん手こずらされたあげく、カモメのフンを背中にかけられる。

> Only one thought occupied my head as we stepped on to the beach: *Why, oh why, couldn't it have done one on Colin instead?* (326)

> （浜辺へ出た時に頭の中を占める思いはただ一つ。*なぜに、ああなぜゆえに、お見舞いされるのが、代わりにコリンではなかったのだろう？*）

翌日には浜辺での球技で、打球を鼻に受けて怪我をした女子を、シードは宿まで抱きかかえて運ぶことになる。それがたまたま、特別に大柄な女子。重さに腕が抜けそうになりつつ、シード

は思う。

Why wasn't it one of the smaller kids? (343)

（*どうして、だれか、もっと小柄な子じゃなかったんだろう？*）

帰校後、鷹の写生にクラス全員がすばらしく集中している時も、シードはこう記す。

It was a moment of treasure and I sighed in the knowledge that no headteacher, governor, education adviser or inspector would see it; where o where was Mrs Sykes? (358)

（それはまたとない貴重な瞬間で、校長も理事も指導主事も視学官も、だれひとり、これを見やしないのだ、とわかっていたから、ため息が出た。どこに、ああどこに、サイクス女史は、おいでなのです？）

視学官のサイクス女史が来校した日には、このクラスは蜂騒ぎでてんやわんや、とても授業どころではなかったのである。

この 3 箇所に共通するのは、目の前の現実とは異なる成り行きを夢想する仮定法、ないし仮定の叙述。そして文語的で、劇的な言い回し。文体も内容も、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』(*Romeo and Juliet*, 1595)の、ジュリエットの独白を想起させる。

O Romeo, Romeo, wherefore art thou Romeo? (2:2:33)

（おお、ロミオ、ロミオ、どうしてあなたはロミオなの？）

つまりシードは、思うにまかせぬ教育現場に文学的視点を持ちこみ、想像力を働かせ、現実の苦難や皮肉を、劇に見立てて昇華し、処理し、消化する。そこには、きわめてイギリス的なユーモア感覚と演劇感覚が介在している。

そして注目すべきは、上掲の祈願文のいずれもが、語りの地の文に組み込まれており、実際には発話として音声化されないことである。思いの強さは時として斜体字（イタリック体）で強調されるほどではあるが、あくまでも胸の内に収められたまま。

こうしたシードの「嘆きの型」は、声にならない嘆きを声にしなくてもすむ方途であり、教員の日常に波を立てないための、ひとつのデバイスとなっている。

それが通知表の記入にも応用されていることが、第 3 巻の次の場面でわかる。

Then there was always fun to be had imagining the things one would *love* to write but would never dare to:

> *If Ian's English was as good as his football he'd have at least three Nobel Prizes; alas, it isn't. Another successful year for Susan: she came top in bossiness and fussing for the fourth year running and thoroughly deserved her* Being a Madam *award.* (367)

（それに、すごく書きたいけど絶対に書きやしないことを想像させてもらうのは、いつだっておもしろいのだった。こんなふうに。

もしイアンが、英語もサッカーと同じくらい得意だったら、ノーベル賞を少なくとも3つは取るでしょうが、悲しいかな、現実は、さにあらず。

今年もスーザンは大成功。いばりんぼと文句垂れの2部門で4年連続首位、まさに「生意気大賞」を取っただけのことはありました。）

この「空想上の通知表」という、教員のガス抜きテクニックは、学校小説のベストセラー、ロアルド・ダール(Roald Dahl, 1916-90)の『マチルダは小さな大天才』(*Matilda*, 1988)の冒頭にも見られる。ダールは舌鋒鋭く児童をバッタやセミや氷山に喩え、言いたい放題に言い散らかしているが、これは文学的想像力が教員生活の嘆きを芸術に転化して軽減する効果を証明した先例とも言えるだろう。

3-2 賛嘆

シードが顕著に描き出す、もうひとつの感情の形は「賛嘆」である。児童の中には時として、教員の指導の域をはるかに超えた高みで輝く、天稟に恵まれた子(gifted child)がいる。そうした天性の才能を前にして、シードは言葉を尽くして誉めそやすのではなく、逆に、心打たれるあまり言葉を失って絶句する。前項で論じた通り、現実の欠け目を埋めるためには、心の中で想像力と機智と饒舌を駆使するシードだが、それとは対照的に、卓絶した天才児を読者に差し出す際には、事実の提示に徹し、余計な描写や評価を極力排する。そうした子どもの天賦の才が、教員の器などの及ぶべくもない、別次元のものであることを、教員の主観を介入させない、という形で、シードは表すのだ。それは同時に、最大級の賛嘆の表現でもある。教員の日常には、そのように恭しく拝受すべき天恵が降臨することもままあるのだ、と示唆しつつ、その僥倖を享受する喜びを、抑えた筆致でこそ、読者の胸に迫るものとして感動的に伝える。タイプは違えど、これもまた英国的アンダーステイトメントの一類型として、「雄弁な思いを、しかし声には出さない」前項の「嘆き」に並ぶもの、という見方もできる。

第3巻では100ページに1人の割合で、こうした異才が輩出する。とりわけリサ(Lisa)の画才は、言葉を奪う。

The moment I saw her painting I almost cried. Using only the cheap, messy powder paints that were the staple of every primary school at that time, a girl of just nine had created something so exquisite and striking that it took the breath away. There was the Harris hawk of the previous day, large and stirring and as fierce as it was meant to be. The other paintings in the room were tentative and soft and flat but here was something in vibrant texture with fiery colour and sharp line.

For a moment I didn't know what to say so I joined in with the chorus of the other children who were now gathering around the table, their admiration and awe spontaneous.

"Wow," we said. There was nothing else to say. "Wow." (358-359)

（その絵を見た途端、私は叫びそうになった。当時どこの小学校にも必ずあった、安物の汚れやすい粉絵の具しか使っていないのに、わずか 9 歳の女児が創造したものは、あまりに精妙で衝撃的で、息を呑むほど。そこにいたのは、このあいだの鴉（ノスリ）だ、大きくて、身を震わせて、まさにしかるべく猛々しくて。教室のほかの絵は遠慮がちで、弱々しくて、平板だったが、ここには、燃えるような色彩、鮮明な描線、脈動する質感を備えた生きものがいた。
　一瞬、言うべき言葉が見つからず、いまやテーブルのまわりに集まっていた子たちから湧いた賞賛と畏敬の声に、私も加わった。
　「うわあ。」私たちは言った。ほかに言うことはなかった。「うわあ。」）

作品のただならぬ出来に、児童は校長を呼びに走り、担任のシードの目には感涙が浮かぶ。

I looked at Lisa to try and express my delight but I could tell that she knew from my face how I felt. (359)

（私はリサを見て、自分の歓喜を口に出そうとしたが、私にはわかった、リサはわかってる、顔を見ただけで、私がどう感じているか。）

シードは 15 年前、小学生の時に描いた絵を思い出す。坑道から上がってきた炭鉱夫たちの絵。自分が特別なことを成しえたのだと、自分でもわかる絵。その絵を見ると先生は、いきなりクラス全員の目の前で、シードを固く抱きしめたのだった。

In Cragthwaite men didn’t hug so I held off, knowing that Joyce would do that for me. But Lisa knew how I felt: she saw it in my eyes. (359)

（クラグスウェイトでは、男はハグをしないから、私は思いとどまった。校長のジョイスが、私の代わりにしてくれるだろうし。でもリサはわかっていた、私がどう感じているか。リサはそれを見たのだ、私の目に。）

シードの発した言葉は、結局、感嘆詞の一語のみ。しかし、共に画芸に秀でた教師と児童は、その「見る力」で、コミュニケーションを果たしおおせる。この場面を支配する沈黙こそが、子どもの才能への最も深い理解と賛嘆を表す形なのである。
　絵なら、たまたま自分も得意だったシードだが、園芸となると、まったくの門外漢。従って、緑の指(green fingers)の持ち主、ティム(Tim)に寄せる賛嘆は、さらに大きな驚きを伴う。学業はまったく振るわず、当地のことわざ、「ヨークシャー生まれのヨークシャー育ち、腕っぷしは強いが頭は弱い」(*Yorkshire born, Yorkshire bred, strong in t’arm and thick in t’head*) (270)の好例とされるティムだけに、ガーデニングの知識と技能の卓越ぶりが判明するや、シードはティムの技量を授業に活用し、クラスの前で発表させたり、実技の手本をプレゼンさせたりする。いわば日陰にいたティムを、日向に出して、日を浴びさせるのである。教育における園芸、とでもいうべき、このやり方で、シードはティムに活躍の場を与え、「菊見る時は陰の人」に回って、クラスの賛嘆の念がティムに注がれるよう演出する。

“Fust, allus pick up the seedlin’s by the leaves.” …With great care he lifted up the seedling, showing the full length of its roots which amazed some of the children….

Tim continued. “Then yer carefully dangle the roots into the hole in the compost like this and press the soil in around gently.”

The first one was done and the little plant stood up proudly in its black pot. The class spontaneously applauded and I joined in; it was a wonderful moment. (278-279)

（「まずよ、いづでも、苗っこは、葉っぱをつまむだよ。」‥‥細心の注意を払って、彼は苗を持ち上げて、見せたその根の全長に、子どもたちの中から驚きの声が上がった‥‥

ティムは話を進めた。「そいがら、そおっと根っこを土床の穴さ垂らすべ、んで、まわりから、土っこ寄せで、やさしぐ押さえるだよ。」

最初の 1 本が完了し、その小さな植物は、黒い植木鉢の中に堂々と立った。クラスから拍手が湧き上がり、それに私も加わった。それは素晴らしい瞬間だった。）

リサの場合と同じく、シードは自身の賛嘆を、クラスの児童たちから「自然」(spontaneous)に湧く賛嘆に同化させる。舞台を用意した教員の功績が目立たぬよう、観客の側に回り、それによって同時に、個人としての賛嘆の声を全体の喝采の中に埋没させる。それは、宝を発掘した教員の手柄を一切主張せずに黒子にとどまろうとする、より純粋な賛嘆の形なのである。

サッカーの天才、イアン(Ian)に寄せるシードの賛嘆は、さらに徹底して客観的な形をとる。

Fifteen years later, this day would be all but forgotten. For Ian Tattershall stepped on to another, larger pitch in front of a crowd of twenty thousand: his debut as a professional footballer. And, remarkably, a few years later Scott followed, making the League himself, before little Robbie, now a strapping six foot three, also walked out in a grand stadium. Both Ian and Robbie played in the top division but for the younger man, who had cried as an infant when his hero brother’s goal had been disallowed, an even greater honour awaited and a little corner of Yorkshire would always remember the day when, with great pride, he pulled on an England shirt. (176)

（15 年後、この日のことはほとんど忘れられることだろう。イアン・タタシャルは別のもっと大きな競技場に踏み出し、2 万の観客の前で、プロのサッカー選手としてデビューしたからだ。そしてなんと、数年後にはスコットも兄に続いてプロ入りを果たし、おちびのロビーも今では 6 フィート 3 インチの偉丈夫で、やはり大舞台に歩み出た。イアンもロビーもプレミア・リーグでプレーしたが、小学校低学年の時、あこがれのお兄ちゃんのゴールが審判に却下されて大泣きした弟のほうには、さらに大きな栄誉が待っていて、ヨークシャーの片隅はいつまでも忘れないだろう、彼が大いなる誇りを持って、イングランド代表のユニフォームを着た日のことを。）

シードの語りはメディアの報道なみにクール。教え子の快挙を語るも、自分は「ヨークシャーの片隅」に身をひそめる。どんな理不尽な不正に遭っても、それをはねのけて大成するほどの、圧倒的な才能。もはや「指導」や「庇護」の必要などを超越して天翔ける子たちを、教員はただ信じて見守ればいい。ほとんど傍観者の域にあるシードの視点は、最上級の賛嘆の表明であり、

それは彼の感情の形に見られる自己抑制の極みとも言えるであろう。

ここで付言すべきは、シードの賛嘆が、児童の傑出した異能だけでなく、目立たない人柄の美しさにも向けられていることである。

見る者の度肝を抜く迫力の画業を成す画伯リサも、シードにとってはまずなにより、激しく咳きこむ自分に水を汲んできてくれる、心優しい女子だった。ほかの子たちが、先生、倒れるんじゃないか、と興味津々で見物する中で、ほほえみながら気遣いを見せるリサを、シードは「わが救い主」(355)と崇める。

第 3 巻では、チーズ工場見学の校外学習で、真面目に取り組む子が少なくて気落ちするシードに、チーズ農家の子ヘレン(Helen)は帰り際、わざわざお礼を言いに来る。「人類にはまだ望みがある」(239)と気を取り直すシード。その後、自宅を訪れた父が、最近の子どもはみんなマナーが悪い、と愚痴ると、シードは「マナーのいい子をひとりは知ってるよ」(245)と答える。

教員の日常生活に、天才たちに劣らない励みと支えをもたらす、心の美人たち。シードが自分の気配を消そうと努めることには、綺羅星を引き立てるだけでなく、そうした野の花を範とする思いもあったものと察知される。

3-3 達成感／無力感

シードの教員生活で特徴的な感情の形には、さらに複雑で、持続的で、強烈ながら――むしろ、強烈なだけに、いっそう――そっと差し出されるものがある。それは、達成感と無力感。真逆に見える、このふたつが、じつは表裏一体のものとして、教員である主人公（シード自身）の日常に、光と影を綾なす。

シードの 3 部作では各巻で 1 件、とても 1 章には収まりきれず 1 冊全体にわたる、長期的で深刻で、厄介で根深い、大きな問題が起こる。そのどれもがシードにとっては、自分の担任クラスの児童に悪影響を及ぼし、自分の教育活動への妨害となり、自分のメンタルをダウンさせるもの。面食らいつつも果敢に取り組む、シードの奮闘。一筋縄ではいかない、難題の手強さ。打つ手がなかなか吉と出ないことが常態と化す中、それでも見えてきた出口に、やっと差す光に目を細め、シードが表す感慨は、もどかしいほどに間接的。勝利感や高揚感の不在こそが、その特色をなす。

派手な表現を保留する平静さ、感情の振幅を最小限にとどめようとする抑制。そこには、こうした課題解決こそが教員の日常なのだ、という会得、こうしたことはこれからも続いていくのだ、という覚悟がある。

教員の仕事では、結果が出ることも、出ないこともある。同じ一つの結果でも、成功した部分と失敗した部分があったりもする。であるならば、一喜一憂せず、達成感にも無力感にも溺れずに、いずれからも等しく学びを得ていくことが必要――そうした見方が、喜怒哀楽の表現を極小化するシードの書きぶりから、浮かび上がってくる。感情表現に費やす紙幅の小ささは、逆に、教員としての視野の広さ、スケールの大きさを示す。英国的なアンダーステイトメントは、ここでは、教員のバランス感覚とストレス・マネジメントの能力に直結しているのである。

第 1 巻の大問題は、校長のモラル・ハラスメントである。初任者のシードを指導するどころか、足を引っぱる校長。授業を見に来ては舌打ちを繰り返し、必要な教具も出し渋り、どんな提案もすべて却下。イギリスでは教員 1 年目は試用期間で、校長の勤務評定が芳しくないと正規採用にならないため、シードは深く悩む。教員としての実力をつけようと日々努力を重ねるが、効果はない。いよいよ煮詰まるシードに、教頭が言う。校長は自分よりずっと有能な新人が煙たいのだ、と。思いもかけない理由に驚きつつも、いくら喜んでもいいはずのシード。しかし、その内心は、

こう書かれるのみ。

. . . I walked out feeling a whole lot better. (111)

（‥‥職員室を出た時の気分は、かなりましだった。）

その後、事態は思わぬ展開を見せ、校長はその学期末に早期退職をする。新しい教育にはもうついていけない、と、年度の途中で匙を投げるのである。旧式の権威主義に凝り固まり、誰からも好かれていなかった、この校長の送別会は、砂を噛むような味気なさ、わざとらしい白々しさ。モラハラから解放され、厄介払いができて、どんなにせいせいしてもいいはずの、被害者シード。だが彼は、こう言うのみ。

It was all rather sad. (150)

（それはすべてが、なんだか悲しいものだった。）

シードががんばればがんばるほど、いい授業をすればするほど、じつは校長を追い詰めていた、という皮肉な事実についての見解もない。長年この学校の児童と教職員を苦しめていた独裁者が、やっと追放されたことへの快哉もない。自分の教育実践がやっと日の目を見たことへの達成感も、一方で、新しい時代のクリエイティブな教育方針が、古い時代の人間にはついに理解されなかった無力感も、本人にはいかに大きくても、やはり匂わされすらしない。

So that was it, my first term. It ended like it began, with a near disaster, but tired as I was, I could hardly wait for the next one. (150)

（それで終わり、私の最初の学期は。終わりも始まりと同じで、災いみたいなものだった。でも、疲れてはいても、次の学期が待ちきれない気持ちだった。）

すべてを簡潔にまとめて、次へ行く。苦悩も迷いも、全部を「日常」と言い切り、乗り切る、教員としての「体力」がついたことを、じつは示しているのだが、表現はいたってさりげない。そこにこもっているはずの、大きな成長と、第一関門を乗り越えた達成感も、疲労感への言及を伴うことで、誇示されずにとどまるのである。

第 2 巻での重い懸案は、不良娘シーナ(Sheena)である。州外の遠い町から移転してきて、村の低所得者層向け公営住宅に入居したシングル・マザーの子。母はメンタルに問題を抱えたシック・マザーでもある。育児放棄されているシーナは素行不良・学習障害・情緒障害の非行少女。英国下層労働者階級の悲惨を凝縮したような家庭に育つシーナは、連日の問題行動で、シードを授業崩壊寸前へ追い込み、級友にも危害を及ぼし、地域でも鼻つまみ者となる。

シードは担任として指導とケアに努め、シーナが孤立しないよう児童たちにも協力を求め、シーナに責任感を育むため、係を割り当てる。ソーシャル・ワーカーや医療関係者とも連携して、安定剤の服用も始めさせる。校長・担任・母親・本人の四者面談で、ようやく心を開き、涙するシーナ。真面目に生きようと努力しはじめ、友だちもできはじめた、その矢先、母が夜逃げし、

シーナも姿を消す。
1 年にわたる懊悩と格闘が水泡に帰す瞬間に直面するシードは、しかし騒がない。

I felt strangely dizzy and empty, not knowing what to say. Joyce put her arm around me, “I’m shocked, too. Do you need to sit down?”
I noticed one or two faces peeping through the window.
“No, I’ll be all right—I’d better get into the room.”
“Well, OK, but I’ll bring you a cup of tea.” (390)

（世界が変にくらくらして、からっぽな気がした。何を言っていいものか。ジョイスは腕で私を抱きかかえた。「私もショックよ。座らなくていい？」
気がつくと、窓からのぞく顔がちらほら見えた。
「いや、大丈夫――教室に戻ったほうが。」
「そう、わかったわ、でも今、お茶を持っていくわね。」）

ショックで腰を抜かすのでは、という校長の懸念を払いのけるシードだが、校長は内心を見抜く。こういう時の紅茶は、英国では気付け薬であり、最大の慰めなのである。
シードは年度末、シーナをほかの児童と並べて回顧し、総括する。この重い一件も、「例外」や「特別」なものとして別扱いにせず、教員の「日常」に取り込んでみせるのだ。

I thought back over the year…Chris…Mervyn…Yvonne, Vanessa, Bill, Guy, Nina and Hazel. And, of course, there was Sheena, who came in like a tornado and left silently in the night. (400-401)

（この 1 年を振り返ると‥‥クリス‥‥マーヴィン‥‥イヴォンヌ、ヴァネッサ、ビル、ガイ、ニーナにヘーゼル。そしてもちろん、シーナがいた。竜巻のようにやってきて、黙って夜に去って行った子。）

シーナに寄せる思いは、シードの達成感と無力感の共存を示す絶好の例である。

She had given me a lesson: that teaching wasn’t easy and that life could be complicated even for a young child. A little wisdom had been passed on but with some pain. Yet she had improved, and there was definite change in her: there was hope and a feeling that she could do well in her next school…. (401)

（あの子は教訓をくれた。教えるのは楽じゃない、そして人生というのは小さな子にも複雑なものだったりするのだと。ささやかな知恵が手渡されたが、それには痛みが伴った。それでもあの子は進歩してたし、明らかに変化はあった。次の学校ではうまくやっていくだろう、そういう希望も予感もあった。）

逆接の接続詞を重ね、できごとの表と裏を確かめながら、来し方と行く末の両方に思いを馳せ、

現実を直視しながらも理想を追うシード。教員の日常とは、今日という 1 日の中に、過去と未来のすべてが含まれる――実績の重みと、果てしない可能性の広がりが内包される――そんな豊かな時間であることが、このシードの感情の形からは、浮かんでくるのだ。

第 3 巻での頭痛の種は、金持ちのドラ息子ジェイソン(Jason)である。よその土地から村に引越してきた、裕福なビジネスマンの子。わがままで礼儀知らずで、自己顕示欲と虚栄心と被害妄想のかたまり。「そんなの知ってる、××さ」、「もっといいところ、行ったことある」と、見栄と自慢とネタバレで、ほかの児童の感動にケチをつけ、学ぶ気持ちを萎えさせる、授業妨害の常習犯。教師に禁止されたことばかりをわざとやらかして、毎日面倒を引き起こすトラブルメーカー。

父親もまさに息子と同じ、鼻につく性格で、中産階級の俗物の典型。高価なボールペンを学校に持って行かせたあげくに失くしてくると、誰かが盗んだに違いない、とあらぬ疑いをかけたり、「みんながぼくをいじめる」という、事実と真逆の息子の言い分を真に受けたりで、しょっちゅう学校に怒鳴りこみをかけてくる、失礼で執拗な、クレーマーにしてモンスター・ペアレント。

この親子には校長がじきじきに乗り出して、訴えられた種々の内容について調査を行い、どれも事実に基づかないことを、視学官の報告書を添えて、父親に突きつける。さらに、若くて有能な担任に恵まれて幸せだ、息子のノートを見るがいい、と言い放つ。言われた父親は、他の児童の両親が担任のシードと保護者面談をしている教室に、あいさつもなく勝手に入っていき、息子の机の中のノートをめくり、また黙って教室から出ていき、車で逃げ帰る。

この父親からは一言の感謝も謝罪もない。しかしクレームがないこと、それがシードには最大の勝利を意味する。それでもシードは、達成感のあまり勝利宣言をしたりはしない。これだけの難物の児童を手なずけるという奇跡を起こしても親にお礼も言われない、という無力感を漏らすこともない。すべては「日常」とすべきなのだ。

> “Well, looks like yer done for t’night, Mr Seed,” chuckled the big farmer.
> “It does,” I said, trying not to look quite as pleased as I was. (381)

（「おんや、もう今夜の仕事は終わりだべ、シード先生」と、大柄な農場主はくすくす笑った。「そのようですね」と私は言い、嬉しさが顔に出ないようにした。）

校長のとりなしにお礼を言いに行くシード。校長はシード以上に平静である。

> “And that was it?”
> “That was it.”
> I thanked her for being so kind and a wonder. She gave me a hug and ordered me home. (382-383)

（「そういうわけだったんですか？」
「そういうわけよ。」
私は校長に、親切と奇跡のお礼を言った。校長はハグしてくれて、お帰んなさい、と告げた。）

余計なことは一切言わない、校長の切り詰めた表現。長きにわたる問題がやっと解決を見た、記念すべき日ですらあるときに、今日の勤務時間は終了、とばかりにさりげなくふるまう、その

かっこよさ。そこには、すべてを「日常」ベースに制御する、プロの手腕の上級者バージョンが、お手本として披露されているのである。

もともとシードも、教員生活にそれなりの覚悟はしていた。このシリーズのオープニング、第1巻の序章で、シードは教職の魅力を、こう語る。

> This was what I faced every day as a new teacher with my own class: a society of extraordinary individuals who were by turns crazy, inspired, alarming, inert, dynamic, unaware and wonderful…No college training, manual, advice or indeed anything could have prepared me for moments like this. I loved it. (6-7)

（こういうことに出くわすのが私の毎日だった、新任教員として自分の担任クラスで。それは、並々ならぬ個性の持ち主が集う社会。この子たちときたら、頭がどうかしてるのかと思えば、勘の鋭い時もあり、こちらを身構えさせる時もあれば、てんで鈍い時もあり、元気いっぱいだったり、うっかりしていたり、すばらしかったり‥‥大学の教員養成の授業も、手引も、助言も、とにかく何だって、こういう瞬間に備えておけるよう教えられたことなんて、まるでなかった。なんてすてきなんだ。）

そして同じ巻の第3章冒頭で、シードはさっそく息切れする。

> I was sitting in the staffroom half asleep with weariness at the end of another exhausting day with my class. I had no idea that teaching could be so physically strenuous, in addition to being mentally and emotionally draining. (48)

（私は職員室で座っていて、へとへとで眠りかけていた。今日もまた、担任のクラスと過ごす、くたびれ果てる一日が終わる。教えるということが、頭も心も疲れるのに加えて、こんなにも肉体を酷使するものだとは、思いもかけなかった。）

すてきだけれど、くたびれる毎日。この教師の日常のアンビヴァレンスは、物語の進行に従い、当初の直感から、より深い感情と認識を伴うものに掘り下げられていく。経験と実績を積むにつれ、教職の日々のこうしたありようをルーティンとしてコントロールできるようになっていく、教師としての成長のプロセスが、このシリーズの読みどころである。

新任教員としてのスタートから、やり手の若手教員としての活躍を経て、やがては、手練れの校長のようになることに憧れる、そうした教員人生の前半の、フレッシュなみずみずしさと、伸びゆく勢いの頼もしさを、作品空間に定着しているところに、シードの学校小説家としての独自の境地が見出される。

3-4 解放感

シードの日常を特徴づける感情の形には、さらにもうひとつ、重要なものがある。それは、上述の、職場で生じる種々の感情とそれに伴う心的抑制を、すべて手放す瞬間の感情――すなわち、解放感である。シードの小説は――それはつまり、シードの教員生活は――そうした解放感を、定期的に味わうことが可能なフォーマットになっている。

まず毎章、前述のように職場と家庭に場面が大きく二分されている中で、毎日、帰宅すると学校のことはいったんすべて放擲されるし、通勤の車中でも景勝地である当地の風景が貴重な気分転換となる。また毎週、週末には、いかにもイギリス人らしく、家族で自然散策をし、近くの滝や山に出かけ、あるいは人里離れた荒地へ足を延ばし、雄大な自然美で心をリフレッシュする。

そして毎巻、巻末は、年度末に学校のことを全部放り出す、大型の解放感の表現が、この学校小説の大きなオチ、という定型が確立している。第 1 巻、世界で一番いたい場所は自宅、と宣するシード。

It was a late July afternoon…As I stood there, my baby son gurgling contentedly on my shoulder, and Barbara now holding us both and looking out through the window too, I realised that there really was nowhere I would rather be. (368-369)

（7 月の遅い午後‥‥私は自宅の居間の窓辺に立ち、赤ん坊の息子が私の肩で満足げに喉を鳴らしていて、妻のバーバラも今は息子と私の両方を抱いて窓の外を眺めている。こうしているとしみじみわかる、ここのほかにいたい場所なんて、本当に、どこにもない。）

第 2 巻、今度は自宅のその窓に、外からペンキを塗りながら、増えた家族にご満悦のシード。

The sun was shining and it was the first weekend of the summer holidays…A cry of “Daddee!” from below caught my ear. There was Barbara, with Tom and Reuben in her arms. I smiled and started down. (400-401)

（陽光輝く、夏休みの最初の週末‥‥「パパ！」という叫びが下から聞こえてきた。そこにいたのはバーバラだ、トムとルービンを腕に抱いて。私はほほえみ、はしごを降りはじめた。）

第 3 巻、夏休み、息子たちと近くの滝へ出かけ、海賊ごっこをするシード。

“Right,” said Tom. “I’ll be Blackbeard, Reuben you’re Captain Hook and Daddy can be Smee.” …I wasn’t sure who Smee was but, with five weeks of holiday ahead, I didn’t care. (406)

（「りょーかい」とトムは言った。「ぼくが黒ひげになるよ、ルービン、おまえはフック船長だ、パパはスミーになっていいよ。」‥‥スミーって、だれのことやら、でも、この先 5 週間は休みなんだ、かまうものか。）

学校に行かなくていい喜びが爆発する、この「すべての教師」シリーズのフィナーレは、不謹慎な本音丸出しの正直さで、爆笑を呼ぶ。そして、この 3 つの幕切れをこうして並べてみると、巻が進むにつれ、家族の数が増え、行動範囲が広がり、成長していく家族の物語が、学校の物語に劣らず、着実に進んでいることも、実感できるようになっている。

このように大小さまざまな解放感がいろいろなサイクルで繰り返し登場する、規則的な小説の作りは、とりもなおさず、主人公の生活に、感情をリセットするシステムが意識的にインストールされていることを示す。

解放感の機会の確保とは、突発事件こそがデフォルトであるような教員生活において、どんなトラブルも日常の一部として織りこみ済みにする仕組みにほかならない。[3] そのようにして保たれる教員の一日、一週、一年、という一定のペースが、さらにヨークシャーの大自然のペースに溶けこみ、人と自然が一体となって織り出される物語――シードの学校小説は、その意味では、田園小説のユニークな一類型、ともいえるだろう。

このシリーズの副題は、そうしたテーマをみごとに約言している。第 1 巻は *A Memoir of Lessons and Life in the Yorkshire Dales*、第 2 巻は *A Further Memoir of Lessons and Life in the Yorkshire Dales*、第 3 巻は *More Lessons and Life from the Yorkshire Dales*。どれも“Lessons”（授業）、“Life”（生活）、“the Yorkshire Dales”（ヨークシャー渓谷地方）の 3 語を含み、[l]の頭韻を効かせながら、職業と人生の両立、また舞台となる地域との関係を、鮮やかに掲出している。シードの文学は、ワーク・ライフ・バランス、およびスクール・コミュニティという、教職の普遍的な課題に、ひとつの具体的な事例と実践的な方法論を提出してもいるのである。

４．結

教員出身の学校小説作家として、文学的視点で教職経験を捉え、教育者・文学者としての知性・感性を両方豊かに盛りこみ、学校生活のドラマと教職の本質を作品に定着している点で、シードは、シェフィールドやフィンと並んで、このジャンルの一翼を担っている。

そのうえでシードが個性的な点は、ひとつには彼の英国性(Englishness)である。たとえばフィンが、貧しいアイルランド移民の子としての民族意識と使命感を、教職にも創作にも強烈に反映させるのに対し[4]、チェシャー州の出身で、生粋のイングランド人であるシードは、妻がドイツ人であることもあって文化的アイデンティティをより意識してか、定住先は英国民の心の原風景である国立公園の田園地帯、週末にたしなむのも国民的娯楽のウォーキングと、英国人の理想を絵に描いたような家庭生活。英国人読者にとって親しみやすく、自分を代入しやすい、この普通さ、平凡さは、「教員の日常」というシードの小説のテーマにも直結している。

またフィンは、アイルランド系ながら、ヨークシャー特有の（イギリスでは相当に例外的な）ずけずけした物言い(bluntness)をマスターして、ここの農村文化に同化するが、シードは伝統的なイギリスの表現様式である、控え目な物言い(understatement)にこそ、ものを言わせており、これもまた一般のイギリス人読者に共感を得やすいところである。

シードの個性は、その実際的な作風にもある。ケント州・バークシャー州の村の学校での体験に基づいた、学校小説の大御所、ミス・リード(Miss Read, 1913-2012)は、『村の学校小品集』(*Tales from a Village School*, 1994)の「序文」で、自分は詩的(poetic)であるより実際的(practical)でありたい、シェリー(Shelley)のような詩人よりトロロップ(Trollope)のような作家になりたい、と思っていた(vii)と吐露しているが、シードはまさにその路線に沿っている。シェフィールドが文体も場面構成も印象主義的で、まさに詩的な世界を構築しているのに比べると、シードの語りはいかにも散文的で、地に足の着いた話しぶり、まさに普段どおりの普通そのものであり、そこにこそ、何事も日常茶飯事と思いなすべし、という彼の教職観が出ているのだ。

ミス・リードとミスター・シード（この敬称は、学校では「リード先生」と「シード先生」という呼び方になる）、[i:d]の音で脚韻する、この好一対の作家たちには、他にも重要な共通点がある。まず、自分にツッコミを入れる自虐的なギャグ・センス、すなわち英国的ユーモアは、学校で起きる大波小波を笑いのめしてたくましく乗り切る、教員のサバイバル・スキルとなっている。

また、ワーク・ライフ・バランスも両者に共通する課題である。女性で独身のリード先生は、友人には呆れられ、通いの家政婦には罵倒されるほどの、超弩級の家事下手ゆえに、[5]「家のことは手抜き」という方針を打ち立て、貫くことで悟りを開く。そこに男性で妻帯者のシード先生は、良き家庭人として、家庭生活と教員生活の両立を可能にする手立てを、それこそ実際的に実演してみせることで、ひとつの別解を加える。その点で作家シードのテキストは、学校現場で多用されるフレーズ、「おもしろくて、ためになる」(interesting and instructive)を地で行く、興趣深くて効用に富む、娯楽的かつ実用的な教科書にもなっているのである。

このように文学的要素と教育的要素をクリエイティブに統合する点で独特の魅力をもつシードの学校小説は、ベストセラーやロングセラーにこそなっていないものの、本国のメディア（主に地方紙）の書評やアマゾンのレビューでは好意的なものも多く、批評家と読者から一定の評価は得ているといえる。シードの現在の出版活動は、子ども向けの本や学校関係者向けの指導書など、教育実践の方に傾いているが、この 3 部作の成しえている文学的貢献を踏まえると、今後、大人向けの創作方面でのさらなる活躍も期待したいところである。

注

1. フィンとシェフィールドの両シリーズの相互関係、および彼らの作品世界がこの地方にもつ意味については、武田(2018)を参照のこと。
2. フィンとシェフィールドの小説技法とテレビドラマの関係については、武田(2020)を参照のこと。
3. ヨークシャー学校小説における教職とトラブル対応の詳細な分析については、武田(2022)を参照のこと。
4. フィンの出自と教職観の関係については、武田(2019b)を参照のこと。
5. イギリスの女性教員の家事能力と所属階級の関係については、武田(2019a)を参照のこと。

参照文献

Dahl, Roald. *Matilda*. London: Penguin, 1988.

Herriot, James. *All Creatures Great and Small*. 1970, 1972, 1973; London: Pan Books, 2013.

---. *All Things Bright and Beautiful*. 1973, 1974; London: Pan Books, 2013.

---. *All Things Wise and Wonderful*. 1976, 1977; London: Pan Books, 2013.

---. *The Lord God Made Them All*. 1981; London: Pan Books, 2013.

---. *Every Living Thing*. 1992; London: Pan Books, 2013.

---. *All Creatures Great and Small*. Perf. Christopher Timothy, Robert Hardy and Peter Davidson. 1978-1990. DVD. Universal Pictures U.K., 2013.

Miss Read. *Tales from a Village School*. London: Michael Joseph, 1994.

Phinn, Gervase. *The Other Side of the Dale*. London: Michael Joseph, 1998; London: Penguin Books, 2010.

---. *Over Hill and Dale*. London: Michael Joseph, 2000; London: Penguin Books, 2010.

---. *Head Over Heels in the Dales*. London: Michael Joseph, 2002; London: Penguin Books, 2010.

---. *Up and Down in the Dales*. London: Michael Joseph, 2004; London: Penguin Books, 2010.

---. *The Heart of the Dales*. London: Michael Joseph, 2007; London: Penguin Books, 2010.

---. *Out of the Woods But Not Over the Hill*. London: Hodder & Stoughton, 2010.

---. *Road to the Dales: The Story of a Yorkshire Lad*. London: Michael Joseph, 2010; London:

Penguin, 2011.
---. *The Little Village School*. London: Hodder & Stoughton, 2011.
---. *Trouble at the Little Village School*. London: Hodder & Stoughton, 2012.
---. *The School Inspector Calls!* London: Hodder & Stoughton, 2013.
---. *A Lesson in Love*. London: Hodder & Stoughton, 2015.
---. *Secrets at the Little Village School*. London: Hodder & Stoughton, 2016.
---. *The School at the Top of the Dale*. London: Hodder & Stoughton, 2018.
---. *Tales Out of School*. London: Hodder & Stoughton, 2020.
---. *A Class Act*. London: Hodder & Stoughton, 2021.
Seed, Andy. *All Teachers Great and Small: A Memoir of Lessons and Life in the Yorkshire Dales*. London: Headline, 2011.
---. *All Teachers Wise and Wonderful: A Further Memoir of Lessons and Life in the Yorkshire Dales*. London: Headline, 2012.
---. *All Teachers Bright and Beautiful: More Lessons and Life from the Yorkshire Dales*. London: Headline, 2013.
---. *A Giant Dose of Gross: Discover the World's Most Disgusting Animals!* QED, 2019.
Sheffield, Jack. *Teacher, Teacher!: The Alternative School Logbook 1977-78.* London: Central Publishing Services, 2004; London: Corgi, 2007.
---. *Mister Teacher: The Alternative School Logbook 1978-79*. London: Corgi, 2008.
---. *Dear Teacher: The Alternative School Logbook 1979-80*. London: Bantam, 2009.
---. *Village Teacher: The Alternative School Logbook 1980-81*. London: Bantam, 2010.
---. *Please Sir!: The Alternative School Logbook 1981-82.* London: Bantam, 2011.
---. *Educating Jack: The Alternative School Logbook 1982-83*. London: Bantam, 2012.
---. *School's Out!: The Alternative School Logbook 1983-84.* London: Bantam, 2013.
---. *Silent Night: The Alternative School Logbook 1984-85*. London: Bantam, 2013.
---. *Star Teacher: The Alternative School Logbook 1985-86*. London: Bantam, 2015.
---. *Happiest Days: The Alternative School Logbook 1986-87*. London: Corgi, 2017.
---. *Starting Over: A Ragley Story 1952-53*. London: Bantam, 2018.
---. *Changing Times: A Ragley Story 1963-64*. London: Bantam, 2019.
---. *Back to School: A Teacher Series Novel 1969-70*. London: Corgi, 2020.
---. *School Days: A Teacher Series Novel 1976-77*. London: Corgi, 2021.
---. *Last Day of School: The Alternative School Logbook 1987-88*. London: Bantam, 2022.
シード、アンディ。『世界一キモイいきもの図鑑』。鹿田昌美・訳。東京：NHK 出版、2020。
ダール、ロアルド。『マチルダは小さな大天才』。宮下峯夫・訳。東京：評論社、2005。
武田ちあき。「サッチャーのお化け――ヨークシャー学校小説シリーズによみがえる英国の幻」。『憑依する英語圏テクスト――亡霊・血・まぼろし』第 8 章。福田敬子・上野直子・松井優子・編。東京：音羽書房鶴見書店、2018。183-204。
---。「イギリス教育小説における学校掃除婦の表象――その文化的意味と政治的機能――」。『埼玉大学紀要（教育学部）人文・社会科学』第 68 巻、第 1 号、2019a。271-284。
---。「ジャーベイズ・フィンの学校小説における教職観――その社会的・時代的・地域的な意味」。『埼玉大学紀要（教育学部）』、第 68 巻、第 2 号、2019b。367-388。

---。「ヨークシャー学校小説におけるジャンルの交差――教育と娯楽の技法」。『埼玉大学紀要（教育学部）』。第 69 巻第 2 号、2020。391-410。
---。「イラクサを掴め――ヨークシャー学校小説における教職とトラブル対応――」、『埼玉大学紀要（教育学部）人文・社会科学』第 71 巻、第 2 号、2022。367-378。
ヘリオット、ジェームズ。『ヘリオット先生奮戦記』上・下巻。大橋吉之輔・訳。ハヤカワ文庫。東京：早川書房、1981。
---。『ヘリオット先生の動物家族』。中川志郎・訳。ちくま文庫。東京：筑摩書房、1989。
---。『Dr. ヘリオットのおかしな体験』。池澤夏樹・訳。集英社文庫。東京：集英社、1981。
---。『ドクター・ヘリオットの毎日が奇跡』、上・下。大熊榮・訳。集英社文庫。東京：集英社、2004。
---。『ドクター・ヘリオットの生きものたちよ』。大熊榮・訳。東京：集英社、1993。
ミス・リード。『村の学校の 40 人――ミス・リード小品集』。中村妙子・訳。東京・日向房、2003。
“Andy Seed.” Authors Aloud UK. 2 May 2022.
＜https://authorsalouduk.co.uk/speaker/andy-seed/＞
“The Blue Peter Book Award Winners.” Goodreads. 2 May 2022.
＜https://www.goodreads.com/award/show/4018-blue-peter-book-award＞
“Cecil Frances Alexander.” Wikipedia. 23 April 2022.
<https://en.wikipedia.org/wiki/Cecil_Frances_Alexander>
“The 2019 Booklist.” North Somerset Teachers’ Book Award. 2 May 2022.
＜https://www.northsomersetteachersbookaward.com/2019award＞

（2023年3月31日提出）
（2023年4月7日受理）

The Marvellous Daily Life of a Teacher:
Mental Health in Yorkshire School Novels by Andy Seed

TAKEDA, Chiaki
Faculty of Education, Saitama University

Abstract

This paper aims to spotlight Andy Seed(?-), the author of *All Teachers* series(2011-2013) set in the Yorkshire Dales like *Teacher* series(2004-2022) by Jack Sheffield(1945-) and *Dales* series (1998-2021) by Gervase Phinn(1946-). While the latter two ex-teachers have gained fame as best-selling novelists, Seed, though a successful and notable writer of educational books for children, has remained rather unknown in the world of literature for adults. Although Seed's orthodox style and reserved narrative might not be so eye-catching as Phinn's Irish wit and Sheffield's Scottish poetic sentiment, in fact Seed's understatement is not only characteristically and charmingly English, but also an important factor of his main theme: mental health in a teacher's daily life. In Seed's school novels, this typically English mental attitude, constraint, is found to be quite effective as a survival skill to make every trouble less dramatic or traumatic, making it easier for a teacher to keep calm and carry on. Seed's novels are carefully planned to outline a teacher's consciousness in his titles, subtitles, contents and plots, and to display a teacher's emotions in various occasions: lamentation, admiration and senses of achievement, powerlessness and liberation. Seed's stories are thoroughly interesting and instructive examples of real and ideal work-life balance for a teacher, and in that sense complement his respected precursor and rhyming pair, Miss Read.

Keywords: Andy Seed, school novel, teacher's life, mental health, Yorkshire